

みる つくる がた

千葉県立美術館報

VOL. 5 NO. 5

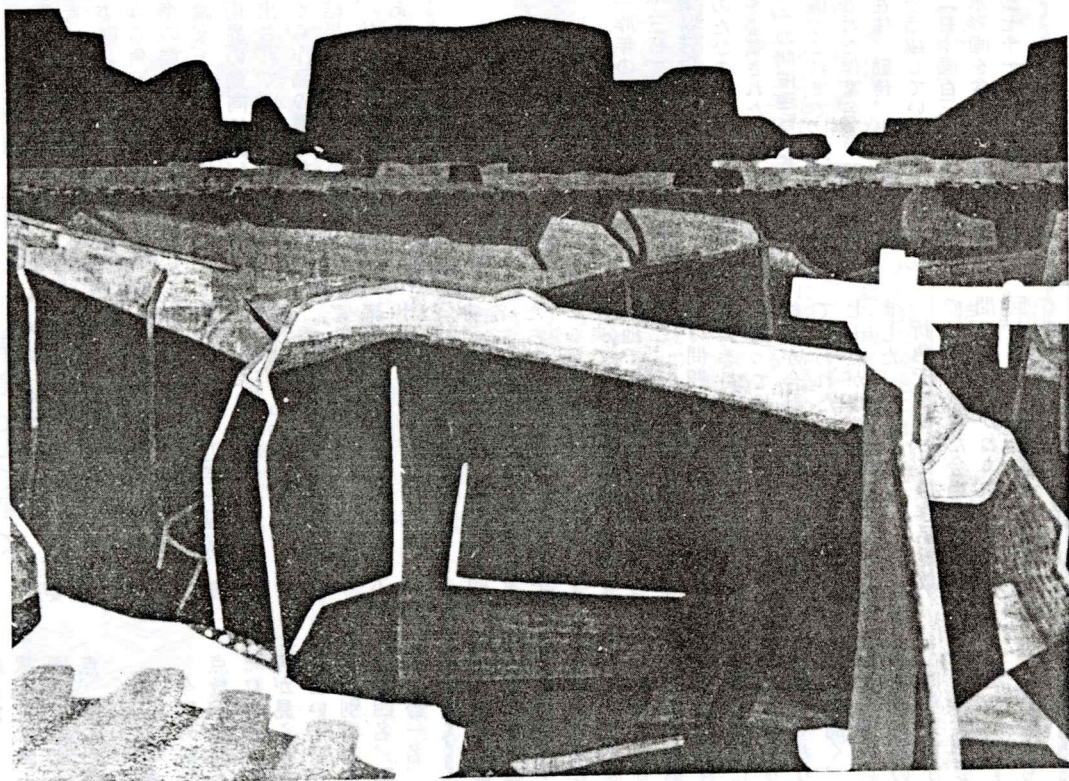
昭和54年2月14日発行

編集・発行人 市原 正夫

〒260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎ 0472-42-8311 (代表)



酒井亜人「太海」

観潮台

このところ年三回の特別展を開催している本館は、新年度も「芹沢銈介展」「水彩画の再発見」など二本を準備している。

いうまでもなく美術展の根幹は作品である。ところがこの作品の所在が意外に不明確で、リスト・アップに時間を要する。もちろん、本館が新設で情報整備が不十分だからだろうが、とにかく、常識的な操作をしながらもこの実感は大きい。

こうした環境で展開する特別展だから、当然のようにリスト・アップの段階から各地の美術館などの友人知己に迷惑をかける。しかし、ありがたいことで生後間もない裏方の悲哀を理解してくれなんとか企画が具体化してテーブル・カットを迎えている。

思えば近代的な施設のなかで、旧態依然の方式が万能とは悲しい。そこで、少しでも効率的な機動力を備えようと、本館の整備計画に従い、間もなく着工する一五〇〇平方メートルの「県民アトリエ」のなかに情報資料室を設けて、自他ともに活用飛躍しようと心がけている。

(高橋在久)

県内ゆかりの作家の 動向を知るために

第2回千葉県秀作美術展

2月8日～3月4日

今日、千葉県の風土にはぐくまれた多くの作家が多彩な分野で活躍している。しかし、その活動の場は県内のみにとどまらず中央へと移っている。そのような中で本県ゆかりの作家を集大成する展覧会を望む声が高まり、昭和五十二年一月に第一回展を開催した。その結果、期待以上の好評を得てここにビエンナーレとして第二回展を開催する。

経過について

対象は、前回同様、千葉県在住・勤務・出身および県内で活躍する作家の過去三年間（昭和五十一年四月～五十二年三月）に団体展、個展、その他で発表し、高く評価された作

品とした。また、日本画・洋画・彫塑・工芸・書・版画の六部門とし選考を行った。

選考には、十六名の選考委員を委嘱し、委員には作品をあらゆる角度から検討し、高い水準の展覧会とするため美術評論家・ジャーナリスト・県美術界の動向に詳しい作家が選出されている。委嘱後、委員から作品の推薦を受け、その結果、一五六点の推薦があり、複数票獲得作品は七〇点であった。

秀作美術展の

選考を終えて

一昨年の年頭（一月五日～二十三日）に開かれた第一回千葉県秀作美術展に続いて、このたびの第二回展の作品選考を委嘱された私たち十六名は、その開催趣旨に基づいて、館側でこれまでに把握し、用意された作家名簿、即ち本県に在住、勤務、出身および県内で活躍している作家のリスト（日本画百三十一名、洋画〈水彩画を含む〉三百九十名、彫塑七十一名、工芸八十七名、

選考について

十一月二十八日付、選考委員会が本館会議室において開かれ、推薦作品をさらにしぼる作業に入り、その結果、日本画十八点、洋画二十六点、彫塑十八点、工芸十四点、書十六点、版画七点で、合計九十九点であった。

委員会での決定をふまえ作家への出品依頼を行ったが、諸事情により十名の作家が不出品となった。その結果、最

第一回展との相違

終点数八十九点となった。内訳は日本画十六点、洋画二十四点、彫塑十八点、工芸十二点、書十四点、版画五点。

今回の特徴は、全体の出品点数が前回より少なくなつたにもかかわらず、新しい頭角が見られたことである。特に若い作家が含まれている。部門別にみると、日本画二名、洋画四名、彫塑三名、工芸一名、書一名、版画一名の計十

て、さらに厳正と慎重に討議を重ねて、調整を行ない、最終的には九十九点を選考いたしました。結果的には前回の百二十二点よりはかなりきびしい選となりました。

今回も多彩で、力作、労作がそろつたものと信じていますが、本県は、既に全国的にも国際的にも著名な作家の幾人かを輩出しており、しかも全般の水準が高く、また県民各位の関心も深い、有数の美術県としては定評のあるところだ。

昨年五月からは世界への空の窓NARITAもいよいよ開港したことです。いったい造形美術というものは、何らの言

四名である。全体の数からはごくわずかな人数ではあるがこのような選抜展には意義深いものと言える。

〔選考委員〕

青木滋芳・浅見喜舟・植村鷹千代・大須賀力・小川正隆・加藤貞雄・桑原住雄・笹岡一・立石春美・千代倉桜舟・中村傳三郎・細野正信・堀江知彦・本間正義・村瀬雅夫・山谷鉄一の各氏（敬称略・五十音順）

葉の障害もなく、視覚的にも精神的にも、地球上の何処の国でも理解や交流を深める有効な機能をもつものであることは申すまでもありません。その意味でも、本県の美術文化の発展と向上には、最も有利な環境で国際的視野をひろげ養う使命が望まれるところでありましょう。このたびも本美術館のこのような企画の継続を通じて、それこそ「みる・かたる・つくる」とに一層の効果的役割が果たされるものと信じ、ますますの期待を寄せる次第です。

選考委員会座長

中村傳三郎

風景画を一堂に展観

東山魁夷「秋深」など

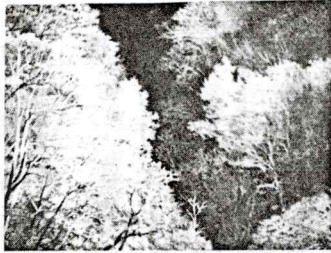
常設収蔵作品展

風景の美

本館も開館以来、五年の歳月が経過し、収蔵作品も年々増加しており、これらの作品を広く常設展として公開している。

和田海岸」、椿貞雄「岩」などや都鳥英喜、石川寅治、原勝郎、三田康の作品を含めて二十人の作家三十二点を展示している。

今回は、収蔵作品から明治以降の画家の描いた風景画に焦点をあて展覧している。風景は、画家にとつて常に身近な存在であり、恰好のモチーフとして大きな役割りを果しており、同一の主題をもとに、作家各自の色彩と技法を駆使して、創造的な美の世界を築き上げている。



東山魁夷「秋深」



石井柏亭「信州風景」

開催近づく

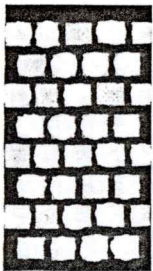
特別展 『芹沢銈介展』

わが国の染色には、古くから葛縵・板メ・摺り・絞り・更紗・糊染など、布や皮・紙等に模様を染める技術が伝えられている。

型によつて染め上げていく型染は、その実用性ともあいまり、人々の生活に深く根をおろしている。

芹沢銈介は、この伝統的な型染にもとつきながら、型絵染という新しい分野を開拓した。多くの衣類はもとより、屏風、額絵、本の装幀・小説の挿絵など、多彩な型染の世界を展開している。

氏は(六九年(明治三十九年)静岡市の呉服太物の卸小売商、大石角次郎の次男として生まれる。小学校の時より図画、手工を得意とし、中学校で水



幾何文額

彩画家の山本正雄に学び、美術学校入学の夢をみるようになる。応用化学科への進学予定であったが、絵画に対する志向止みがたく、東京高等工業学校図案科に進み、三才の時芹沢たよと結婚、静岡県立静岡工業試験場に就職し、漆器・染色・木工等の図案指導をするかたわら、店舗の装飾・広告・祭の花車・木工玩具等の考案製造も行なっている。その後柳宗悦・浜田庄司・河井寛次郎等と共に民芸運動に参加するなど、六才の現在に到るまで、型絵染を中心に、ガラス絵・板絵・陶器等の絵画面に及ぶまで幅広い創作活動を続けている。一九六五年(昭和三十一年)には型絵染で重要無形文化財保持者(人間国宝)に



色入子菱摺白絹着物



紙漉村旅日記

認定され、一九六六年には文化功労者の栄誉に輝き、また、一九六六年には、パリ国立グラン・パレにおいて芹沢展を開催し、芸術性豊かなパリ市民たちに驚きと感銘をもたらしました。

▼会期

四月九日(金)～五月三日(日)
九時～四時三〇分月曜休館

▼入場料

大人三〇〇円(二〇〇円)
大・高生二〇〇円(一〇〇円)
中・小生一〇〇円(五〇円)

(内は三名以上の団体料金、なお県内学校に限り、学校団体料金もあります。)

▼講演会

五月六日(日) 午後二時
千葉県立美術館普及室

▼「芹沢銈介の世界」

金子量重氏(大妻女子大学講師・美術評論家)

▼美術を語る会

五月十二日(土) 午後二時
千葉県立美術館普及室
テーマ・染織工芸

美術普及棟について、数回の「美術普及棟建設について何う会」を開き、各界の方々の意見を聞き構想を練ってきた。そして、名称も新たに「県民アトリエ」とし、いよいよ契約、着工の運びとなった。

そして遅くも昭和五十五年一月には県民美術サロンとして計画され、完成すると特色のある施設として全国的にも注目を浴びるものと考えられ、既に館報第三号でお知らせしたことであるが、単に「みる」だけの美術館でなく「かた」る「つく」る「と」総合的に動的な美の広場の運営をモットーとして、展示棟、管理棟、美術普及棟の三棟が三位一体となるよう考慮され、美術普及棟建設構想案が検討されてきたのである。

昭和五十三年五月に、当美術館内に美術普及棟建設準備委員会が構成され、同年十二月までに十四回にわたって、その構想を検討し積み重ね、またこの間の二回は、各界の代表をまねいてご意見を伺う会を開催するなど種々貴重なご意見をいただいた。このような経過をたどり基本的理念が次の四項目にまとまった。(詳細略)

- ①県民の美術実技センターとして
- ②県民の美術学習センターとして
- ③県民の美術情報センターとして
- ④県民の美術振興センターとして……である。

美術普及棟

県民アトリエとして

いよいよ着工

の中で、どのような室、どの位の規模の室、採光照明、棟全体の向き、室の配置等々、その機能、構造、ならびに施設設備の内容等が、この準備委員会で検討された主なるものである。

各室については「美術実技部門」として、第一アトリエ(平面)第二アトリエ(立体)第三アトリエ(屋外)「美術学習部門」として講堂、研修室(視聴覚室)集合室(畳敷)「美術情報部門」として、情

報資料室(閲覧・視聴・書架・資料・職員各コーナー)「美術振興部門」として、ロビー・談話・休憩所・事務室その他等である。

各室で行われる事業内容や実施計画の具体的なものは当美術館として今後早急に検討し、広く県民の方々が楽しい美の広場として提供し得るよう努力していきたい。なお事業内容として考えられる主なるものは「美術実技部門」では……各種実技講座(初心者、経験者等層別を考慮して、それに伴う用具・材料

・資料の準備、展示等)「美術学習部門」では講演会・映画会・美術を語る会、解説会・録画・TV視聴・開閉会式・授与式等の入場・貸与等「美術情報部門」では図書・資料の情報公開・資料・ポスター展示、フィルム、その他の資料の貸出し「美術振興部門」ではVTRの視聴・談話・休息等自主的な交流の場として提供等が考えられている。

「堀江正章とその周辺」展 の資料コーナーより

十二月七日から一月十五日まで開催した堀江正章展でも資料コーナーを設置した。従

来知られていなかった堀江の業績の一部面を知り得たと好評であった。

その中で、明治二十六年飯田正宣らが企画した修身教授用に描いた掛絵がある。この掛絵は、三十枚セットで当時各地の師範学校で用いられた飯田は、松本開智学校、栃木師範学校の校長を歴任した教育者であり、堀江と遠縁にあたる人であった。

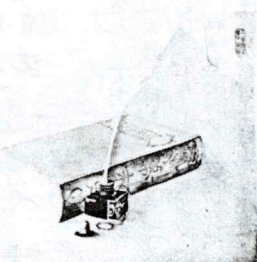
次に、千葉中学校の図画教師をしていた折の、生徒の画



帳である。これは、明治四十五年の県庁舎の新築落成記念として大共進会が催された時に出品されたもので、同年皇太子(大正天皇)の行幸の際、閲覧されたもので、堀江が用器画に重点をおき美術教育をしていたことを知り得る貴重な資料である。北沢楽天が、堀江の門に入る動機として、堀江が用器画にたけていたためであると言われているが、それを裏付けすることができ

る。

以上の二点は、資料の一部分の紹介であるが、教育者としての一面を知る上で重要な役割を果すであろう。今回の資料によりすぐれた美術家とともに教育者としての才能を示していたという声が高かった。



昭和五十四年度普及事業予定

美術を語る会

回	期 日	テ ー マ
第 1 回	54・5・12(土)	染色工芸
第 2 回	7・28(土)	風景と作家
第 3 回	9・29(土)	近代美術の中の 房総
第 4 回	11・10(土)	初期県展にみる 作家たち
第 5 回	55・1・19(土)	板倉鼎を語る
第 6 回	3・8(土)	日本水彩画の 流れ

実技講座

期 日	内 容
54・6・9(土) 10(日)	デッサン入門講座 (第 1 期)
7・7(土) 8(日)	デッサン入門講座 (第 2 期)
8・25(土) 26(日)	てん刻入門講座 (第 1 期)
55・2・23(土) 24(日)	てん刻入門講座 (第 2 期)
3・6(木) 7(金)	七宝焼講習会

県民アトリエの完成を五十五年一月にひかえ、「みる・かたる・つくる」活動「美の広場」の充実を目指し、新年度も各種の事業を計画している。项目的には、本年度のものを引き継ぎ行うが、より内容の充実を計りたい。また、県民アトリエ完成までの間、第六展示室を美術普及室として使用し、浅井忠関係資料をはじめとする資料類の展示、図書・情報・集会の各コーナーを設置し、利用者の便を図るようにしている。

美術を語る会

この会は、講演的と言われる一方的な知識を伝えるのとは異なり、「語り合い」の中から美術についての知識・理解を深めることを目的としている。多くの方々の希望に沿って引き継ぎ行う。

来年度は、多彩に展開される本館企画展に焦点をあて、各界からの話題提供者による経験豊かな話が期待される。なお、本会の年間会員を募集しており、その会員には、毎回事前に連絡する。

実技講座

「つくる」活動の充実を目指して実施してきた実技講座は、毎回希望者が増加している。

応募しても希望者多数のため参加できなかった人々から「ぜひとも参加したい」との声が多いので、来年度も今年度実施した講座を再度行うことになった。

五十五年になると、新築された県民アトリエでの講座を行うことができるが、今年度も大半のものは研究工作室で実施するため、定員増加の見込みはない。

各回、著名な人々を講師として、より充実した実り多い講座にして行きたい。多少の

材料費以外、受講料は無料をたてまえたので、多くの方々の参加を期待している。

美術館夏季大学

入館される人々から「絵はどのように見るのか」という質問が数多く出される。そして美術についての知識・教養の機会をほしいとの要望が強い。そこで「美術を見る目」を養うための基礎知識の修得を目的とし、日本美術の歴史的な推移や多様化した現代美術などの理解を深めるために施されたのがこの「美術館夏季大学」である。

講演会

講演会については、特別展開催の時期に行い年間三回予定されている。これは、特別展の内容に促して行い、展覧会をより深く理解するためだけでなく、専門的な知識をも同時に学ぶことを目的としている。

特に、五十五年の第三回目は、県民アトリエ完成記念として盛大に行うことが決定しており、新しい県民アトリエ講堂での初めての事業として有意義なものとしたい。開催日の予定は次の通りである。

- 第一回 四月二十一日(土)
- 第二回 十月六日(土)
- 第三回 三月十六日(日)

来年度は、第三回として八

月三日(金)・四日(土)の両日にわたり実施する。時間は、午前十時から午後四時までで、受講料は無料の予定である。

内容の詳細については、まだ未定であるが、予定としては一分野に重点をあて、一貫したテーマを通して、より深い知識の修得をめざして行きたい。講師についても、過去二回と同様に、専門研究家に依頼しより充実した実り多いものとしたい。

新収蔵作品紹介

（53年12月～54年1月）

購入

酒井亜人作日本画「垣根」

「山」「晩秋」「茶室」

「太海」「樹」

板倉伊八氏より

宮崎丈二作洋画「残雪」

小安多栄氏より

小安花郎作「バイロンの言葉」

鈴木徹作彫刻「帰雲・春」

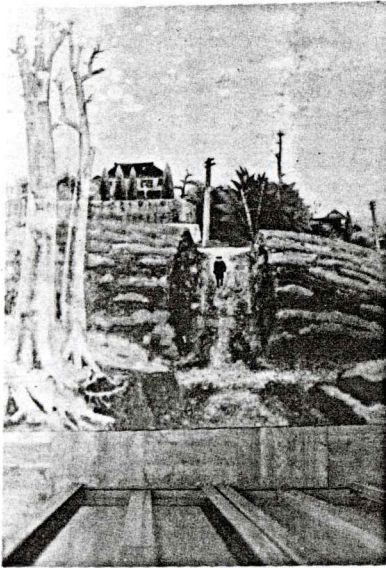
寄贈

次の資料が寄贈されました。
ここに厚くお礼申し上げます。

酒井四郎氏より

酒井亜人作日本画「冬」

酒井房子氏より



酒井亜人「冬」



鈴木 徹「帰雲・春」

美の泉

絵を観る

「誰もが絵を理解しようとする。それなのに、何故、鳥たちのさえずりを理解しようと思わないのか。何故、夜とか花といった、われわれをとりまいているものには、理解しようなどと、思わなくても愛着を覚えるのだろうか。」

これは一時期、解らない絵の代名詞のように使われた「ピカソの絵」の作者、パブロ・ピカソの言葉だ。

美しいもの、好ましいものに出会いながら、私達はともすれば既成の観念や、他人の評言に惑わされ、眼前の実体を見失いがちなものである。

鳥たちのさえずりに聴き惚れ、花の美しさに出会って素直に喜びの声を上げる人が、何故か、絵画作品の前に立つと、しかつめらしい顔をして、考え込んでしまう人が多いようだ。

「私には絵が解りません。」「現代の絵は難しくて……」展示室を巡回していると、

よくこんな言葉に出会う。けれど、往々にして、その人の言葉は正しくないようだ。その人は、何か特別な絵の見方があるように錯覚しているのではなからうか。

何故なら、次のような言葉が続くことが多いからだ。

「でもこの絵を見ていると、心が洗われるようです。澄んだ画面の緊張感がすばらしい。」

「何だか、あつたかな気分になるんです。この絵。」

「この絵はあの赤が、あの青の色が決っているんだわ、きつと。」

「はじめはただ気持ちが悪い絵だと思っていました。が、じつと見ているうちにいろんなことが思い出されてくるのです。遠い昔の田舎のこととか。学生時代の下宿屋とか……。」

「そうです。これでいいのです。すぐには言葉にならなくても、既にこの人たちは、作品から何かを受けとっているのだから。素直に絵の前に佇むことさえ出来るなら、絵を理解しようとする努力は不要ではないか。」

むしろ、自分が絵から感じ

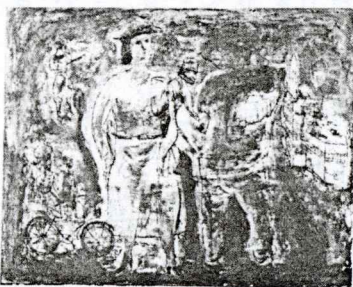
取ったことを、言葉にしてみることが大切だ。独り言でも良いと思う。友達に語るのも理解の一つといえる。

亀井勝一郎は、良い作品には二度喜びがあると云った意味のことを云ったことがある。

最初の出会いの感動と、それを言葉にして、他人に伝えようとする時の、苦しくも、努力のしがいのある喜びと。

多くの絵に出会い、多くの友達に自分の感じたものを伝えた時、その人はもう絵が解らないとは言わなくなると思う。

(H)



松本峻介「街(自転車)」
(天折の画家たち「展より」)

トピックス

●手づくりの
楽しさを満喫

七宝焼講習会

昨年の十二月二日
三日の二日間、長南
光男氏（千葉大学教
授）を講師に迎えて、
七宝焼講習会が開かれた。ス
ライドや8mmのフィルムで、
制作工程の概略を見た後にそ
れぞれ作成にとりかかった。
制作技法の習得を通して、
手づくりの楽しさ、使う喜び
を味わえたようだ。講習の終
わりには、色とりどりの作品
が完成していた。アクセサリ
ーに、室内装飾品にと活用さ
れることだろう。



七宝焼講習会から

●大きな足跡

五〇万人目の入館者

開館以来四年と二ヶ月余り
の昭和五十三年十二月十七日
(日)、遂に五〇万人目の入館者
を迎えることができた。
当美術館に輝かしい足跡を
残してくれた方は、茂原市立
東部小学校六年、林亜希子さ
んで、この日はお母さんと弟
さんといっしょに、「子ども県
展」に入選した自分の作品や
友達作品を見に来て、この
機会に恵まれたようだ。なお
亜希子さんには記念品が贈ら
れた。
今後、ますます広く県民の
皆様に親しまれる美術館にし
て行きたい。



林亜希子さん（左）

●寒さの中の熱気

第五回美術を語る会

去る一月十三日（土）、堀江

正章を語る」と題して、前美
術館長 松戸節三、画家の遠
藤健郎の両氏を話題提供者と
して迎え、堀江について語り
合った。

この日はあいにく、朝方か
ら夕方近くまで雪に見舞われ
たが、熱心な方々が雪にもめ
げず多勢参加され、その語り
合いは、外の寒さとはうって
かわって熱気でむんむんする
ほどであった。



楽しい美術を語る会

伝言板

○談話コーナーを、より充実
したものとするため、投稿を
お待ちしております。美術館
への御意見・御希望、また展
覧会等の感想など何でも結構
です。自由な声の欄として御
利用ください。

談話コーナー

美術館に思う

原 真佐子

（東京・墨田区在住）

昨年、池袋の西武美術館で
デュフィ展が催されました時
は、飛ぶようにして行つてま
いりました。デュフィの絵を
見ていると、モーツアルトや
ドビッシの曲が聞こえてく
るようで楽しくて……。それ
に色がきれいで、私は特に、
あのアネモネが大好きです。
お話は変わりますが、美術
館でも博物館でも見たい、識
りたいと思うものにひかれて
行くのですけれど、でも、そ
れプラスアルファが、私の場
合には欲しいのです。ですから、
デパートで催されるのは
余り好きではありません。三
越の院展などでは、その例で、
美しい絵を見ている間、呼び
出しの音がわずらわしく、又
演出のつもりでしょうが音楽
など流したりして、本当に壊
されてしまう感じがします。画を

見て少し疲れた時、遠くガラ
スごしに見える緑、それが私
には何よりです。その点、町
中、ビル街にあっても、出光
もサントリーもガラスごしに
お堀ばたの緑が、ほっと一息
させてくれます。都の美術館
も博物館もその点では随分得
をしていると思います。
色々予算もあつて大変なこ
とだと思えますけれど、千葉
の美術館ももう少し緑があつ
たらと、何時も何う度に思つ
ております。正直に申します
と、初めてまいりました時、
すばらしい建物なのにガラ
スごしにあのタンクが見えた
時には、ちょっとがっかり。
緑でぬりつぶしてしまいたい
などと、勝手なことを思つた
りしております。木を植えて
も、大きく育つ迄は大変なこ
とだと思えますけれど……
しかし、千葉県立美術館で
は、大変高価で私も買いし
ぶっている美術雑誌などが自
由に閲覧できますことは、実
にすばらしいことだと思います。
先日伺いましたとき、次々と
新刊雑誌を読ませていただき、
時のたつのを忘れてしまいま
した。

